

オペラ パレルモ、マッシモ劇場の《トゥーランドット》

チャン・イーモウ演出の《トゥーランドット》をパレルモのマッシモ劇場で見た（この演出はフィレンツェ歌劇場からマッシモ劇場が買い取ったもので、9月のフィレンツェ歌劇場来日公演もこの演出による）。中国の紫禁城でのプレミエ（2001年）のときのキャストは残っていないが、（日本ではフリットリがリユーで再登場する）歌手陣は軽めながらも粒が揃っていた。イーモウの演出はハリウッド色が出ていて飽きさせない。中国人ダンサーたちの振り付けも衣装も、プレミエから進化し、アジア的でない直接的な色気を過剰アピールしているので西洋人にも違和感を抱かせたようだが、メロディにピッタリと合う振り付けで、曲が頭に浮かぶとつい踊ってしまいたくなるほど強烈な印象を与えていた。公開リハーサルは廃棄ガス対策で車通行止めのため1時間遅れ、プレミエ開始はオケのストで約1時間半待たされ、殺伐としていた観客を惹き付けるには功を奏したかもしれない。指揮台のサンティは、集中力を欠いたまま演奏を始めたオケを上手く統率していた。

題名役のルカーチは、高音ではどうしてもヒステリックになってしまう従来のトゥーランドットだが、揺れる女心を弱声で適切に表現し、人間味を感じさせた。韓国人の新進テノール、ホンはアリアで入るタイミングをミスしたが、甘い歌い回しのクラブであった。リユーのマルフィーも細めな声が、リユーの純粋な心そのものようで、思いのほかマッチしており、ティムールのジャイオッティは73歳とは思えない、正当派の歌唱を聴かせてくれた。

（中 東生）